

第八節 中等唱歌教科書の出版

明治時代の東京音楽学校は三種類の唱歌集を編集出版した。いずれも師範学校、中学校、高等女学校の教科用書に作成したものである。曲の多くは外国の名歌を選び、音楽取調掛以来の方法で、そのメロディーに日本語の歌詞を当てはめた。それは原詞と内容的に必ずしも一致したものではない。そのため、当時このような唱歌の作り方に対して、さまざまな意見が述べられていた。中から三つの評論を紹介しておく。

帝國の音楽を盛ならしめよ

M. H. 生

嗚呼帝國の氣象てふものは何れにぞ存する吾人敢て國粹保存主義に心酔する頑固の言を放つにあらざ唯歐化潮流に犯され一も二もなく善となく悪となく均しく是れ摸擬する事を廢して帝國自身の我物をして蟄居せしめず照々然たる氣焰を吐かしめよと云ふのみ藹々愁然たる状を呈せしむる勿れと注告するなり

世間の唱ふる音楽改良とは何をか云ふ西洋音楽を其儘輸入する直譯する是れそも本領か然らば改良と云はんより寧ろ西洋音楽に化すると云ふこそ適當ならんと信ず吾人茲に言はん音楽上の改良とは唯だに悪を去り善に赴くと云ふが如き一般事物の改良にあるなくして人情風俗言語に關する人世の好尚嗜好に従て進歩せしむるものゝ謂にして決して固有の國風を變化し他國風に改革するの謂にあらざるなり顧みよ終日肉食をなし起臥共に洋服を身に纏へよと言はゞ百千

人中幾何かある是れ蓋し氣候上及國体上家屋構造上の國性が其變化を許さざるによるなり況んや國風の遺傳と感情との勢力ある遮障者あるをや音楽の改良定義果して吾人の言眞なりせば音楽も亦國風の遺傳及感情が主として此遮障者となり國体上變化せざらん事を務む是を以て例令西洋直譯主義の音楽をして帝國從來の音楽に代へしめんと務むるも豈に出來得べきの事業ならんや我か朝古來より支那樂の傳來を見上古の帝王之をして遍く上廟堂より下庶民に至るまで行はしめんとせしが尙今日に於て端唄三味線の勢力遙かに雅樂の上に出で居るにあらざや是れ支那國風の本邦に適應せざるによる詳言せば支那人の嗜好が日本人の嗜好と其趣きを異にするが故なり同人種の支那人同旋律より組成せる歌曲すら猶此くの如し況んや全く異人種なる西洋國風及異旋律なる音曲をや日本人の嗜好に合せんとするも望み得べからざる事なり吾人は支那樂は惡し西洋音樂は惡しと云ふにあらざ唯我國風を棄て嗜好に合せざるものを無理に注入するの惡しきを云ふのみさればよろしく我國風に基き短あらば彼の長を取りて之を補ひ以て人情風俗の進歩上眞正の改良を擧ぐべきを主張するなり

第一歌詞附旋律

西洋の音曲は和聲學上の規則に基づき復音諸重音の如く和聲の曲に構成せられ優美雄壯なる性を有する長音階より組織せらる而して本邦の音曲は和聲學上の規則より出でたるに非ず單獨聲の曲なり且つ憂鬱の性を有する短音階より組織せらる夫れ斯くの如くなれば本邦音樂も維新前は敢て問はず今日の文明界に欠點なしとせず是れ改良の急なりと云ふ所以なり

今左に改良の一端を言はんみやさん及かつほれの如きは進行曲に最も宜ろしき律より成る若し此曲の歌詞を改め唱歌用の追行アイチに供するが如き其他夕ぐれ、春雨、老松等優美の曲皆以て音楽上妙あるべし然れ共是れ皆雑曲なり猥褻なりと唱ふるは唯歌詞の悪しきが爲にして曲の悪しきにあらざるなり今日小學校に於て唱歌用に供する曲中泰西の俗曲亦無しとせず世人の勝手なる日本の俗は是れ用えべからずと云ひ而して西洋の俗曲は用ひて敢て怪まざるは何ぞ尙ほ唱歌曲譜にどゞ一中の淫猥なる歌詞を附して見よ即ち猥褻の音曲なりと謂はんされば本邦の音曲凡て道德を害するものならず歌詞を變更するに於ては敢て道德風俗を亂すの恐れあらざるべし我音曲も西洋音曲も源を問はゞ均しく是れ印度に起原し唯時代と經過傳來せし人種國土の差異あるのみ本は一なり是故に吾人の絶叫し以て天下音楽界に訴へんとするものは日本古來の曲中歌詞の悪しきものは變じて用ゐよ曲の長音階に變じ得べきものは之を改めよ換言せば憂鬱の性に加ふるに雄壯を以てし所謂短音階によりては憂鬱の曲を長音階を以て優美雄壯の曲を譜し及ぶ限りに於て本邦人嗜好の原曲によりて國風を保ち新曲は短長の二音階によりて譜せよと云ふにあり然らざれば假令歐州樂に改めんとするも其目的を達し得べしと信ずる能はざるなり

(未完)

(『音楽雜誌』十六号、明治二十五年一月)

唱歌の撰擇

今の唱歌を作るは多く西洋樂譜に依りてす、是れ大に善し、然れども中に甚だしきは西洋樂譜其儘に我歌を付して之を歌はしむ。亦中には歌により考査して自己の案出にて樂譜を作るものあり。西洋譜に我歌を直に適用するものは譜其物は興味あるものも我歌と適合せざる爲に全く其譜の興味を失ふのみならず歌ふ人自身すらもなほ其歌の何たるやを解すること能はざるに至る。況んや隔壁之を聞くものは全く其歌すらも知ること能はざるなり。例へば「さくらばな」と日本語にては流調に云ふべきを、洋譜の爲に或は「さ」にアクセントを置き、或は「な」にアクセントを置き、聞くものは其櫻花なるか何なるかを知ることすら難し、況んや之に依て感慨を惹起せらるゝもの誰かあらむ。余輩今日の唱歌中極めて雜亂此等の點に注意せざるものあるを見る、是れ實に教育上少なからざる弊害を在するものなるべしと信ず。一般の唱歌教師たるものは力めて如此弊なき唱歌を撰擇することを要す、亦世の作曲家及音楽學校の輩宜しく茲に意を用ゆべきなり。

(霞里)

西曲を原語のまま唱ふのと、原語を國語の歌詞に改めて唱ふのと、聽いて何方が面白いかと聞くと、一般の人は大かた、原語のままが可い、國語であつても通じない分らないといふ人が多い、甚しきは西曲に國語を附けるのは絶対に不成功なものであるとまでいふ人もある。

しかし吾等は根本的に此非難は否定するものであると共に、一方にては大に吾黨の警省を促すべきものがあると思ふのである。歌詞

を付けるに、強弱長短または音調などについて不用意に筆を下して、唯音符の數に語數を合せるやうな附けかたは、勿論論外であるが、唱歌者その人の一語一音の發音の甚だ不正確にして且つ不明瞭であつたなら、如何に正確に音符語を付けて居ても、遂に聴衆に首肯を與へることは出来ないのは知れたことである。吾等は聲樂家が此點に精緻なる注意と研究を積まれんことを望むものである。國語の發音法は、實に今は甚しき混亂と粗雑を極め、曖昧不正確の聲音を以て現はされて居るのである、謂はゞ國語の危機に瀕して居るのである。文部省の國語統一の方法は、唯目で見る國語の上に重きを置かれて居るの觀がある、そこで其生命たる眼目たる發音の正法を立て、其統一を計るといふは、實に我聲樂家諸君の大任務ではないか。國語發音法のオーソリチーは、實に諸君を措いては、他にその人を求めることは出来ないのではないか。吾等は音樂家としての諸君を尊敬すると共に、聲音學者としての諸君を期待するものである。蓋し發音法に拙き聲樂家は、また聲樂家としての價値の上に、何等の尊敬を拂ふべきものでないといふことは、正當な批判ではあるまいか。

若し夫れ國語には、子音の明瞭に發音されるものが殆んど無いから唱ひ悪いとか、アクセントが明晰に附けられないから唱ひ悪いなどといふ人があつたら、日本國民たることを恥と思つて居るやうな非國民であるし、また箇人としても研究心のない意氣地のない自我のない劣等の人格である、かやうなものは蓋し何處の國にもあるまい。

要するに、西曲の音符語を、國語にするのが可いも悪いも、原語

そのまゝが可いも悪いも、唱歌者の研究の程度の深淺一つによるのである(音符語の附けかたの可否は別として)これさへ立派に表現が出来れば、先きに述べた非難の聲は、おのづから消えうせるのである。故に先づ聲樂家の第一着手として執るべき研究と勉強とは、實に國語の發音法ではあるまいか。

(『音樂』第三卷十二号、明治四十五年)

『中等唱歌集』明治二十二年(一八八九)十二月刊行

資料により原曲ならびに作詞・作曲の明らかなものは記した。

- (一) 君が代
- (二) 紀元節
- (三) 天長節
- (四) 旭の旗
- (五) 三千餘萬
- (六) 矢玉ハ衢 伊澤修二作曲、里見義作詞
- (七) 君が代の初春 原曲は Wake wake the morning 里見義作詞
- (八) 織なす錦 二部合唱
- (九) 御稜威の光 三部合唱
- (十) 御國の民 三部合唱 原曲はアメリカのヘール・コロンビア
- (十一) 保昌 三部合唱 原曲はモーツアルトのオペラ「魔笛」から
- (十二) 凱旋 三部合唱 原曲はヘンデルのオラトリオ「ユダス・マカベウス」より(凱旋の歌)
- (十三) 國旗 三部合唱
- (十四) 火砲の雷 三部合唱 原曲はドイツのヘラインの守り
- (十五) 埴生の宿 四部合唱 原曲はH・R・ビショップ作曲(ホーム・スウィート・ホーム)、里見義作詞
- (十六) 身も世も忘れ 四部合唱

- (乙) 君は神 四部合唱 原曲はベートヴェン作曲〈Die Ehre Gottes〉、
里見義作詞
- (丙) 憲法発布の頌 四部合唱

『中學唱歌』明治三十四年（一九〇一）、中学校用文部省検定教科書

三十八曲の単音唱歌が掲載されているが、その多くは当時、東京音楽学校の教官、学生（瀧廉太郎ら）であったものの新作である。版權が東京音楽学校におかれているため、同唱歌集には作曲・作者名が記載されていない。なお作者名の判明したものについてのみ曲名を抽出して記しておく。この作詞・作曲者は故遠藤宏氏が当時この唱歌集作成に関係のあった方々の話にもとづいて記したものである。△印は確認のないもの。

例言

- 一 本編は中学校用に充つる目的を以て編纂せる唱歌集とす
- 一 本校曩に是種の唱歌集編纂の必要を認むるや廣く世の文學家教育并に音樂家に委嘱して作歌作曲せしめ歲月を経て一百有餘種を得たりしが尙その足らざるを補はむが爲に更に同一の方法により恰く材料を内外に求め新に又一百有餘種を集め得たり茲に於て選定委員を設け前後合せて得たるもの、中現今中學校生徒の實狀に參照して最も適切なるべきもの三十八種を精選せしめたるが則ち本編なり
- 一 本編に用ゐたる曲譜の多數は邦人の製作に係り其他は泰西作曲家の手に成れるものとす

一 本編は歌曲の程度題目の種類并に排列の順序等に關して教科書として未だ完全ならざる點なきを保せずと雖も之に依りて漸次歩武を進めぬば庶幾くは音樂の効果を實現せしむることを得む

明治三十四年三月

東京音樂學校長 渡邊 龍 聖

- 駒の蹄 小山作之助作曲
牛おふ童 安藤幸作曲
我等は中學一年生 小山作之助作曲
前途萬里 瀧廉太郎作曲
占守島 安藤幸作曲
太平洋 永井幸次郎作曲
寄宿舎の古釣瓶 小池友七作曲、小山作之助作曲
老將軍 深澤登代吉作曲
武藏野 瀧廉太郎作曲
入船出船 田村虎藏作曲
遠別離 杉浦チカ作曲
△壺の碑 栗本清夫作曲
△祖先の靈 栗本清夫作曲
初旅 橋本正作作曲
箱根八里 鳥居忱作詞、瀧廉太郎作曲
荒城の月 土井晚翠作詞、瀧廉太郎作曲
甲鐵艦 山田源一郎作曲
△歸雁 岡野貞一作曲
豐太閤 瀧廉太郎作曲
去年今夜 岡野貞一作曲
△今は學校後に見て 幸田延作曲

明治三十四年（一九〇一）五月十九日、ここの中学唱歌の披露演奏会が行われた。瀧廉太郎の〈箱根八里〉〈荒城の月〉などが初演された日である。彼はこの頃ドイツへ向けて留学の途にあり、インド洋を航海中であつた。

『中等唱歌』明治四十三年一月二十二日出版

東京音楽学校が出版した唱歌の中でピアノ伴奏附の楽譜ははじめてである。従来多くの例にならって、ヨーロッパのメロディーに歌詞をつけたものが多い。しかし小山作之助や納所辨次郎、山田源一郎らの作曲作品も見られる。唱歌集というよりも歌曲集の体裁である。歌詞および曲の選定委員としてA・ユンケル、H・ヴェルクマイスター、鳥居忱、武島又次郎、富尾木知佳、島崎赤太郎、吉丸一昌、乙骨三郎、楠美恩三郎、田村虎藏、岡野貞一、南能衛、文部省視学官吉岡郷甫（東京音楽学校嘱託講師）諸氏の名があげられている。

三種類とも楽譜は巻末の楽譜資料を参照。